

「神の御座を見上げて」-マタイによる福音書講解説教94-

詩篇
マタイによる福音書

第11章 4節～7節
第23章 13節～22節

説教 岡村 恒 牧師

主イエスは、この日どうしても我慢ならなかったようです。「あなたがたは、わざわざである。」(13節)繰り返し激しく、律法学者とパリサイ人が名指して非難をされます。彼らは聖書の専門家でした。決して不信仰であったり、悪人であった訳ではないと思います。ところが主イエスは彼らと、彼らの言うことに聞き従おうとする人々が、神の救いからほど遠い姿であることをご覧になっていました。

マタイによる福音書は、くどい程に主イエスと律法学者の論争や主イエスのたとえ話、そして終末についての話を記しています。主イエスが何のために地上に来て、十字架の上であれほど苦しんで死んでいかねばならなかったか、私たちにはっきり分かるようになるためです。

今日の中心の主題は誓い、約束と言うことです。律法学者、パリサイ人は聖書の言葉を説き明かして、人々が神に喜ばれて生き、祝福を受けて死んで神のものとなるようにと、勧める役割を負っていました。そして自分がその手本となるように人々に見せながら歩きました。律法を守り、神の前で定めを守って生きる、長い祈りを捧げ、たくさん捧げ物をして生きる。それが良いことだと人々は思っていました。

『神殿をさして誓うなら、そのままでよいが、神殿の黄金をさして誓うなら、果す責任がある』(16節)『祭壇をさして誓うなら、そのままでよいが、その上の供え物をさして誓うなら、果す責任がある』(18節)律法学者やパリサイ人は理由をこねて、約束を守らねばならないケースと守らなくてもいいケースを考えたようです。

人々が神に願い事をするときに、誓いをしました。神様に全身全霊を捧げる意思表示をする言葉です。しかし、気をつけないとこれは単なる商売のような話になります。これだけの犠牲を私は捧げるので、その見返りに犠牲にふさわしいだけのものを神がくれるはずだ。人間同士ではそれが常識です。私たちもしばしば、神に対して同じことをしてしまいます。

結婚式の誓約、<病めるときも健やかな時も、これを愛し慰め助け敬うか。>そう問いかけられ、<約束します。>と答えて結婚の約束が成立します。もし神が支えてくださるのでなければ、決して守れない約束です。洗礼を受けると

きの告白も神の憐れみがなければ到底告白できないものです。そうしてみると、私たちが地上で行う告白や約束は、私たち人間には本当の意味で守り通すことができないのです。私たちの内に真実がないからです。誓約を守り通すためには、真実であるお方の助けが必要です。

神にかけて誓うと言うのは、自分の約束が信頼できないものなので、自分の傍らに神を引きずり下ろして保証人としてたてるという話です。「祭壇をさして誓う者」(20節)、「神殿をさして誓う者」(21節)、「天をさして誓う者」(22節)。人々が、誓約というときに、自分以外の保証を必要としたという話です。

約束を守るというのは、1度決断してできることではなく、守ろうという思いを持ち続け、努力をし続けることを意味します。信仰の歩みは少し違います。ただ神の憐れみにより、神の恵みによって聖霊なる神が私たちを慰め、励まし、助けてくださって、私たちが神を見上げて歩むことができるようになるからです。

《恵み》というのはプレゼントという意味です。500年前、1人の信仰者が必死に手を伸ばして神にたどり着こうとしました。しかし彼は、発見しました。違う、神の方から手を伸ばして私を捕まえてくださるのだと。神を信じる信仰によってのみ私はこの絶望から救い上げられる。聖書にそう書いてあると。

《インマヌエル(神、我らと共にいる)》という言葉を実にし、主イエスを送って、どこまでも誠実であることを神ご自身がお示しになりました。神が約束をして私たちを捉え、私たちに信仰を与えてくださる。主イエスは、御座の上に座っておられるお方が真実であるので、その方を見上げて生きれば良いと言われました。

神は聖なるお方です。主イエスは神にかけて誓ったり、祭壇にかけて誓うようなことはなさいませんでした。主イエスは神と等しいお方、主イエスの約束は一つ残らず実現しました。そして今、完成しつつあります。私を信じなさい、そして永遠の命を得て、喜んで生きれば良い。主イエスは今日も私たちを招き、神の変わることはない誓約の真只中に置いてくださいました。

(記 説教要約奉仕者)